



回想—疾走の日々—

勝岡 憲生*

はじめに

皮膚科勤務医の道を歩み始めて退職するまで36年、その間海外留学、国内出向はあったものの、私はその大部分の年月を大学医学部および附属病院に勤務した。学生時代を含めると、これまでの人生の3分の2近くを相模原に建つ北里大学に在籍したことになる。そして今、大学を退職して3年が経過しようとしている。いまだ「私の歩んだ道」を総括できていないのは気にかかるが、私の「道々の思い出」の一端を綴ってみることにした。

1. 皮膚科入局

「医学部懇話会」で、西山茂夫教授(現 北里大学名誉教授)から皮膚科学に対する想いを伺い、皮膚科入局を決心した。北里大学医学部懇話会は、教員と学生、そして学年を越えた学生同士の懇親を深めることを目的とする。同会は、教授あるいは准教授1名と各学年数名の所属学生をもって班単位で構成され、毎年開催することを義務づけられている。当時はほとんど飲み会の類であったが、学生にとっては教師と気さくに語り合える好機であった。火中の栗を拾う思いで敢えて新設医大に赴任なされたのであろう若き教授のお話は、すべてが新鮮で夢が充満していた。教授が発する自信に裏打ちされたオーラは、学生の私をわくわくさせた。そして、「酒

が飲め、野球ができること」が入局の条件であった。私は医学部野球部所属であることを強調して入局を許可していただいた。

私と同様に、先輩・後輩のほとんどが教授に魅了されて次々と入局し、当時の皮膚科医局はこのうえなく活気に満ちていた。そして私も吸い込まれるように西山皮膚科学に傾倒することとなった。研修医、病棟医時代は夢中のうちに過ぎたが、托鉢の鉢が日々満たされるのを実感した年月でもあった。皮膚科医局全員で(とくに私が)野球に熱を入れたことも楽しい思い出である。

培われた私なりの皮膚科学があるとすれば、それは西山先生から授かった教示が基本でありすべてともいえる。若いころ直に教えていただく機会が多かったのは幸運であった。皮膚病理組織学では、「臨床像を想像しつつ病理所見を読み取ることによって疾患の病態を掌握する」ことを学んだ。1枚の病理標本から病態を推理し、診断に結びつける楽しさを知った。溢れるほどの貴重な教訓を賜ったが、凡庸な私の受け皿に限界があったのが悔やまれる。

医局では優れた臨床医である諸先輩にも恵まれた。当時講師であった斉藤隆三先生(元 東邦大学医療センター大橋病院教授)、非常勤講師として大学に定期的にお越しになっていた山本達雄先生(元 東京都健康長寿医療センター病院皮膚科部長)からも折に触れご教授いただいた。

研究の基礎は、長年米国に留学された後に北

* Katsuoka, Kensei (北里大学名誉教授)
自宅(〒248-0016 鎌倉市長谷1-12-15)

里大学に准教授として赴任された神崎 保先生(現鹿兒島大学名誉教授)から学んだ。研究者の心構えから教えていただいた。未熟であった私には理解が及ばないこともあり、ときに反発さえした。しかし、神崎先生から「実験の手引き」を授かることなしに、後のドイツ留学での成果はなかった。当時先端的手法であった細胞培養の手技を会得すると、私には「外毛根鞘腫細胞由来の線維芽細胞成長因子の解析」というテーマが与えられた。実験を通して研究におけるpriorityの重要性も学んだ。

II. ドイツ留学

1982年5月、東京で開催された第16回国際皮膚科学会の会場で、西山先生から留学の打診があった。「君、ドイツに留学しないか」というお話であった。同学会にドイツ(当時の西独)からErlangen大学のOtto, P. Hornstein教授が来日しており、留学生を受け入れるとのことであった。唐突なお話であったが、「お願いします」と即答した。

1984年1月上旬、Köln市での語学研修から私の異国生活が始まった。1月から4月中旬までの3カ月余、市郊外のドイツ人家庭の一室(ほぼ屋根裏部屋)を住まいとし語学学校に通った。この時期は日照時間が短く、暗く寒い日が続き、気が滅入ることもしばしばであった。臨床から離れることへの不安と焦りを感じたのもこのころである。

Köln市での語学研修を終え、同年4月下旬、留学先のHautklinik (Friedrich-Alexander-Universität Erlangen-Nürnberg, Hautklinik)のあるErlangen市に車(辛うじて手が届く価格であったドイツ車Polo)で移動した。移動日は一転して初夏を思わせる好天に恵まれ、アウトバーンを走りFranken地方に入ると景色は一層美しさを増した。同市は人口約10万の小学園都市で、ワーグナー作曲の楽劇「ニュルンベルクのマイスタージンガー」でも知られるNürnberg市の北西約20kmに位置する。当時の西独の多くの大学病院がそうであったように、同大学病



著者近影

院も各科が独立して市内に分散していた。Hautklinikは町の東に位置し、広い敷地内に外来・病棟はもちろんのこと検査室・研究室も余裕をもって建てられていた。ベッド数は100を超え、年間入院患者数は2,500人以上であった。外来は年8,000人余の新患があり、手術件数は3,000例を超えていた。総外来患者数に対する入院患者数の比率が著しく高いのは、中部Franken地方の各地から入院精査および加療の必要な患者が多数紹介されてくることによる。

Hautklinikの主任教授がHornstein先生であった。教授のご専門は、皮膚病理組織学、口腔粘膜疾患、湿疹・アレルギー性疾患およびandrol-ogyであるが、専門分野に限らず広い知識をお持ちで、学問全般に対する探究心はご高齢となった今も衰えることはない。その姿勢は哲学的威厳さえ漂い敬服するほかない。

私はI.C.P (Impulse Cytophotometry) の研究室に配属された。当時研究室では、ヒト成長期毛のDNA Flow Cytometryの測定結果が出つつあり、私も毛髪に関する研究に従事することとなった。その時期にイギリスの基礎研究者らにより、ラットの髭から分離した毛乳頭(dermal papilla, DP)の*in vitro*での培養と、その培養毛乳頭細胞(DP cells)の特性に関する論文が発表された。この報告は、毛髪研究の方向性を模索していた私には朗報であった。そこで早速、ヒト成長期毛のDPの培養を手掛けた(図1)。早朝から市内の脳神経外科病院に通い、1時間半から



図1 1984年、ヒトDPの培養に成功。培養開始5日目、DP cellsの増殖を確認。DP cellsに関する研究のスタートを切る。

長いときには3～4時間手術室前に待機し(ほぼ直立して)、検体(正常頭皮)をいただてくるのが日課となった。そしてそれらの検体から顕微鏡下でDPを分離・培養し、DP cellsの形態および動態を観察し続けた。何よりも根気を必要としたが、若かったゆえに成し得た実験でもあった。以後私は、「DP cellsの生物学的特性および毛成長メカニズムの解析」をテーマとして掲げ研究を続けた。

留学中の研究過程で、培養DP cellsのcollagen synthesisの測定を思い立ち、München大学皮膚科(当時の主任教授：Prof. Otto. Braun-Falco)の准教授であったProf. Thomas Krieg(現Köln大学主任教授)の下で実験する機会を得た。彼はCollagen代謝に関する第一人者として知られていた。Erlangen市からMünchen市までの約200 km(往復400 km)を連日愛車Poloで通勤した。最初の数日は速度無制限のアウトバーンを疾走するのが心地好かった。しかし、しばらくすると睡魔に襲われることが多くなり、助手席の妻の叱咤で我に返ることがしばしばであった。3カ月にわたる出向研究は、私が予測した以上の成果をもたらした。親身に実験の指導をしてくれたT.Krieg、そして出向を許可して下さったHornstein先生のお蔭である(図2)。

多くの海外留学生がそうであるように多少の辛酸を嘗めたものの、ドイツ留学は私にとって掛け替えのない経験と人という財産をもたらした。



図2 1986年、研究室にて。留学終了を迎え、O.P. Hornstein教授より錫製のビールジョッキを賜る。目が潤む筆者。左はH. Schell教授。

た。2年8カ月の留学生活であったが、私のなかで占める観念的重みはその数倍の年数に相当するような気がしている。それもすべては私の不器用さをご承知のうえで、ドイツに留学の機会を与えてくださった西山先生のご高配なくしては叶わなかったことである。

Ⅲ. 主任教授就任

私は1995年4月、北里大学医学部主任教授に就任した。1970年以降、数多く設立された新設医学部の卒業生としては初めての臨床系教授でもあり、幾分かの注目を浴びた。就任時には、多くの先輩や友人から祝辞をいただくとともに、非常に重い責任を背負う宿命を心配していただいた。茨の道を覚悟しての出発であった。

教授就任直後から数々の学内委員会委員に任命され、業務に追われる日々が続いた。そのような時期に西山先生から「勝岡君、足元をみるように」という忠告をいただき我に返った。医局員一人ひとりに気を配り、現場の状況をしっかり把握することを怠るな、という戒めであると理解した。以後私は主任教授としての責務を忘れることなく行動した、という自負はあるが、道すがら迷いの連続でもあった。

Ⅳ. 学会・研究会開催

教授在任中には関係者の協力の下に多くの学会・研究会を主催することができた。



図3 2005年, 第7回日独皮膚科学会(Dresden)にて, 憧れの名だたる先生方(現 名誉教授)に混じって興奮ぎみの筆者。左からE. Schöpf先生(Freiburg大学), 西山茂夫先生(北里大学), O.Braun-Falco先生(München大学), 筆者, R.Happle先生(Marburg大学)

1. 第8回日独皮膚科学会

日独皮膚科学会 (German-Japanese Society of Dermatology, GJSD) は, ドイツ側はOtto P. Hornstein教授, 日本側は西山茂夫教授と故 西尾一方教授(産業医科大学)が中心となって創設された。1987年の第17回世界皮膚科学会(Berlin)の終了後, 第1回日独皮膚科学会がHornstein教授を会頭としてErlangenで開催された。そして同会は今日まで両国で交互に開催されている(図3)。1990年には第2回学会が西山教授を会頭とし箱根で開催された。私は, 当時北里大学准教授で学会の事務局長であった西岡 清先生(現 東京医科歯科大学名誉教授)のご指示の下に開催のお手伝いをした。以来, 西岡先生には学問はもとより多岐にわたりご指導を賜っている。

2007年11月, 私は第8回日独皮膚科学会を横浜(会場はHotel New Grand Yokohama)で主催した。教授在任中に開催した学会・研究会の中でも, それは私がもっとも思いを寄せた学会であった。参加者はドイツ側から53名, 日本側から106名, 合計159名を数え, 盛大な会となった。2日間のScientific Programの総演題数は62題にのぼり, 活発な討論が繰り広げられた。Social Programとして鎌倉大仏と建長寺を見学した後,

横浜三溪園を散策するツアーを楽しんだ。天候にも恵まれ, 皆さんに満喫していただくことができた。学会のFarewell Reception はYokohama Bay Cruiseの船上で行った。心地よい揺れとともに, 両国の交流が一層深まる和やかな一時であった。そしてClosing Addressでは, 感激のあまり涙が出て声にならず, 皆さんから「がんばれ」の掛け声をいただいた。些か体裁の悪い結末となった。下船後も船着き場は余韻に浸る人たちでしばし賑わっていた。数日後, 内外から多数の便りをいただいた。医局員および関係者による綿密な準備と秩序ある行動に対する称賛の言葉がこのうえなく嬉しかった。同僚の皆には心の内で深く頭を下げた。そして, 私が背負ってきた役目の一つを果たし終えたという安堵感に浸ることができた。

2. 第13回毛髪科学研究会

毛髪科学研究会(Society for Hair Science Research, SHSR)は, 小川秀興先生(現 順天堂大学名誉教授, 同大学理事長)を発起者として, わが国の毛髪研究を推進することを目的に創設された。その後, 同研究会の発足を契機に定期的な国際毛髪研究学会(International Congress of Hair Research)が開催されるに至った。小川先生には同研究会の創立時から世話人の一人に加

えていただき、後には第3代世話人代表に推挙していただいた。お付き合いさせていただいた過程で、先生の卓越した企画力、実行力には感服することしばしばであった。

2005年11月、第13回毛髪科学研究会 (13th Annual Meeting of SHSR) を主催した。海外からの特別講演者の一人として Dr. Robert.M. Hoffman (Anti Cancer, Inc., San Diego) を招いた。彼は第1回同研究会以来の友人である。私の教授在任中、彼の研究室に医局からの留学生を継続的に受け入れてくれた。彼の好意的指導により、留学者たちは毛髪に関する一連の優れた研究業績を残すことができた。

V. 教授退任記念講演会

2013年2月24日、Hotel New Grand Yokohama で教授退任記念講演会および祝賀会を催していただいた。日本皮膚科学会東京支部に属する先生方が多数参加してくださった。お祝いしていただく立場でありながら、発起人の方々に無理をお願いして、「皮膚科診療のエッセンスを語

る—北里大学医学部皮膚科講師10人による—」と題した記念講演会を企画させていただいた。現役講師10人がミニレクチャーするという他に例がないプログラムであったが、彼らの日頃の努力とその成果を紹介することができ、大変高い評価をいただいた。改めて同僚の皆を誇りに思うとともに、彼らに感謝した講演会でもあった。

おわりに

皮膚科入局以来、私はアウトバーンを疾走するがごとく速度無制限で走り続けてきた。若いころは周囲の気色に無頓着であったが、主任教授を務めた18年の間は道々に迷い、急ブレーキを踏むこともしばしばであった。迷いつつ疾走する、すなわち暴走することもあり、同僚の皆を多分に当惑させてしまった。反省しきりであるが、それでも医局から次世代を担う心ある臨床医が数多く巣立ったことは誇りである。私が歩んだ道に関わってくださったすべての方に謝意を表したい。

